

東書教育賞は教育現場を支援します



代表取締役社長

川畑慈範

今朝はやや冷え込みが厳しかったわけですが、幸い贈呈式にふさわしい快晴に恵まれまして安堵しているところです。主催者を代表して一言お祝いのご挨拶を申し上げます。

まずは第24回東書教育賞を受賞された先生方、まことにありがとうございます。心より喜び申し上げます。本日は公私ともご多忙のなか、休日にもかかわらず贈呈式にご出席くださいまして厚くお礼申し上げます。また受賞された先生方をはじめ当教育賞に論文をお寄せいただきました多くの先生方に感謝申し上げるとともに、たゆみない日ごろのご実践とご研究に心より敬意を表する次第でございます。

さて、昨年はアメリカ発の金融危機が燎原の火のごとく世界中にまたたくまに広がり、100年に一度といわれる世界同時不況の嵐が吹き荒れ、年が改まりましてもまだ続いている状態です。こうした未曾有の混乱の陰に隠れた観がございますが、昨年は我が国のこれからの教育にとってたいへん重要な1年であったと考えております。ちょうど1年前、1月17日でしたか、初等中等教育の学習指導要領の改善に関する中央教育審議会の最終答申が出され、3月には小学校、中学校の新しい学習指導要領が告示されました。遅れていた高等学校の学習指導要領も昨年の年末、ようやく公表されまして、まもなく告示の運びと伺っております。これで一応、新しい教育課程の改革のメニューは出そろったという状況で

す。

新しい教育課程が完全実施されるのは、ご承知のように小学校が平成23年度から、中学校が翌24年度からと確定しております。昨年末に急きょ、高等学校の数学と理科は1年前倒して、中学校と同じ平成24年度から学年進行で順次、実施するということが決まっております。あとは義務教育ではまもなくですが、この4月、新学期から理数の前倒しを含む移行措置が実施されることになっております。

新しい教育課程、より具体的には学習指導要領ですが、改訂の方向、内容に関しては賛否の分かれるところがあるかと思いますが、これまでと異なる点が一つだけあると考えております。それは中教審の答申の最後のほうにございますが、教師が子どもたちと向き合う時間の確保などの、教育条件の整備という項目が新たに設けられていることです。これはいわば学習指導要領の改訂が教育条件の整備とセットで提言されている。これまでにはなかった、そういう意味では非常に画期的なことではないかと思っています。

その条件整備のなかには私どもが深く絡みますけれども、教科書の質量両面の充実も要請されていますが、なんといっても眼目は教職員定数の改善、あるいは外部人材の登用、教師の事務負担の軽減といったことになろうかと思います。しかし、ご承知のように昨年の7月、国会に報

告された教育振興基本計画でも、当初は盛り込まれた数値目標が最終的には外れたということがございました。また平成20年度、21年度の概算要求段階であった教職員定数増も、予算の段階で大幅に切り下げることがございまして、条件整備が計画どおりには必ずしも実現していないという状況かと思っています。

今回の改訂では多くの教科で現行に比べて時間数も指導内容もかなり増えております。教科書のページ数を2倍にせよというような教育再生懇談会の提言もございましたが、そこまではいかないと、確実に教科書は厚くなる。すなわち指導すべき内容が増えるということは間違いないと思っております。もちろん、教育条件の整備というのは教職員定数の改善だけではございませんが、それが十分に達成されないまま課題だけがどんどん増えていくという状況が続いているかと思っております。ますます現場の先生方のご負担が増すのではないかと懸念しております。

教育制度改革というのは、故障している自動車に乗ったままその故障を修理することに等しいということを言われた方がおられますけれども、それほど困難でデリケートなことなのだと思います。教育内容や教育制度は社会や時代の変化の要請に応じて変わってまいります。一つの時代でも変わらないのは、この困難な仕事を担う主体は現場で子どもたちと向き合っておられる先生方であるということ、そしてこの困難な仕事は現場の先生方の地道な、かつチャレンジ精神にあふれた創造的な実践を通して行われる

しかないということだと思っております。今回受賞された先生方のご論文はその候補の例であり、当教育賞も多くの先生方が日々懸命に改善の努力を積み重ねておられるということ、広く世の中にお知らせすることで教育界にいささか貢献しているのではないかと自負しております。

弊社はおかげさまで今年10月に創業100周年を迎えることになります。創業以来、一貫して教育の主体を担う先生方をサポートするということ、を第一の使命としてまいりました。そのサポートの一環として先生方への恩返しの意味を含めて、1984年に創設した当教育賞も次回で第25回を迎え、四半世紀の歴史を刻むことになります。ここまで続けてこられたのも、貴重な研究、実践論文をご応募いただいた先生方のおかげと感謝しております。先生方におかれましては、引き続き東書教育賞をご支援いただき、お知り合いの先生方にもご紹介いただきますようお願い申し上げます。

最後になりますが、公私ともご多忙のなか多くの時間を割いていただき、最終審査をご担当いただいた寺崎先生、坂元先生をはじめ審査員の先生方、そして一次審査をご担当いただいた東京教育研究所の先生方にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。また、本日ご出席いただいた報道関係の皆様方に感謝申し上げて、簡単ではございますが挨拶とさせていただきます。あらためて受賞された先生方、本日はまことにめでとうございます。

教育と文化の情報発信

教科書・教材・教育ソフト・学力調査・体力テスト・学校評価・一般書籍・事辞典・Web ショップ 他

創業100年。

東京書籍はみなさまに支えられ、本年10月に創業100周年を迎えます。社会的使命にお応えするため、新たな第一歩を踏み出す東京書籍に引き続き、ご支援のほどお願い申し上げます。



おかげさまで100周年

EDUCATION & CULTURE

東京書籍



〒114-8524 東京都北区堀船 2-17-1



第24回「東書教育賞」の審査を終えて



A部門審査委員長
寺崎昌男先生

受賞されました先生方、おめでとうございます。おいでいただいて、お顔を見られるということをお願いしております。

さて、今回、24回というほとんど四半世紀に1年足りないだけという長い歴史を重ねてまいりましたが、過去にさかのぼってみますと、昭和60年度が第1回でした。このときの応募者の数は160編でした。それが次第に応募数を伸ばしてまいりまして、平成18年度、一昨年は270編、昨年19年度は294編、今回はちょっと減りましたが、約260編となっております。つまり200編後半というところをきちんと保ちながら、現在毎年の審査に私たちは当たらせていただいているわけです。こういうことは、おそらく小中学校に配布させていただく入賞論文集が先生方にある程度、浸透してきたと言えるかもしれませんし、なによりも東書教育賞そのものの情報がけっこう広がってきたことによるのではないかと、非常に喜んでおります。

今回の課題は、ご承知のように「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。授業が習得から活用へというふう大きく転換しておりますが、学力問題は依然として教育界の底流にある大きな問題です。それもポイントは学力の到達度ではなくて、学習意欲そのものであるということをはっきりしております。そのなかで子どもたちが生き生きと学ぶことができるためには、教師に何ができるか、それが問われており

ます。それを正面から取り上げたテーマが「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっているわけです。

幸福と不幸、あるいは絶頂と奈落が本当に次々にはないまぜになって起きてくるような現代の社会のなかで、子どもたちにだけ意欲をもてと言うのは、ひょっとしたら酷なことかもしれません。私たちがまず意欲をもつべきではないかとさえ思います。しかし、にもかかわらず本当の教育の最前線のところでは、先生方と子どもたちとの独自の世界はつくられているわけで、その世界が生き生きとなるということに対して、先生方がどれくらい努力していращやるか、それがわかればこの事業の社会的な意義があると思い、私どもも毎年審査に協力いたしているわけです。

基準として、毎年この席で申し上げておりますが、念のために申し上げたいと思います。基準は三つございます。第1番目は実践性という観点です。はじめから実践記録を要望しているのに、実践性がポイントだというのはどういうことかと思われるかもしれませんが、しかし、これはけっこう重大なポイントなのです。というのは、いろいろな論考のなかにもどこにでも見られるような理論、あるいはだれでも使っているような言葉、それだけが重ねられているというきわめて概念的なもの、あるいは実践からはむしろ離れて、その論文自体の整合性や言葉だけが重ねられている、こういうものが少なくないということを私ど

もは長年の審査のなかで感じてきたわけですが、したがって見るときは、論文のなかに先生方と子どもたちとのかかわり方や、お互いの姿、とくに子どもたちの変容が具体的に記されているかどうか、これを非常に重要なポイントとしております。

2番目は創意工夫という観点であります。どういう工夫がこのテーマに即してなされているかということです。

3番目はいまのことと若干ずれますが、一般性があるかどうかという問題です。非常に特別な実践ではなくて、だれにでも応用できるかどうか。それから子どもたちの発達の段階、適時性に対する配慮がきちんとなされているかどうか。そういう問題がございます。縦に見た時間的関係の整合性といいますか、そういうことを私どもは重視しております。結局、あまりに特別な条件のもとで、それからいま申した縦の軸からあまりに離れたところで行われている実践については、それは評価できないということでやってまいりました。

この三つの観点は、口で言うほど簡単に適用できるものではございません。いちばん問題なのは2番目と3番目です。つまり創意工夫に基づいているかどうかという尺度と、一般性があるかどうかという尺度は時に矛盾いたします。創意工夫があるがゆえにきわめて個別的だという場合があります。あるいはその逆に、どなたでもできそうだけれども、だから創意工夫が感じられないという問題もありまして、この二つは常に予定調和的に両立するものではございません。非常にその点は大きい矛盾も含んでおりますが、やはり私どもが常に心して審査している尺度といいますか、物差しなのです。

もう一つは、理解されやすく表現されているか。テーマと内容が一致しているか。論文としての体裁は整っているか。これは教育論文に限らず、およそ文章というものの基本的な性格についての評価ももちろん話題に上ります。以上のような基準を毎年適用しながら、しかし毎年異なる論文を読ませていただいているところです。

内容について申し上げます。A部門の小学校

では161編の応募がありましたが、このなかから最優秀賞1編、優秀賞2編、奨励賞2編、計5編を選択させていただきました。数からいっても相当な、いわば上位激戦です。やはり今年も上位激戦というにふさわしいのが小学校のところですよ。

最優秀賞には奈良県の御所市立葛小学校、福本義久先生の「不登校事例における教員の職能成長」が選ばれました。この論文は10年前に不登校から完全回復した子ども、およびその母親に担任としてかかわってこられた記録を、先生の回顧を横糸に、当時の事実を縦糸にして編み上げるつもりでおまとめになったものです。不登校の子どもについては、実は多くの教師たちが全国で直面しているわけですが、その扱いには非常に悩みが伴います。この論文は、不登校から登校へというステップが実にわかりやすく述べられております。段階的にどのように子どもに対応するか、子どもの態度や意欲や関心や興味等々がどういうふうに変わってきたか、そのなかで教師の対応力、指導力の向上にどう役立てたらいいかということです。

私の感じではそういう対応が、実は教師としての職能向上につながれていることが、この実践の非常に大きいポイントだと思います。大学でもFDという先生の勉強が、いまあらためて強調されています。教授たちはもっと授業に関して、学生とのアプローチに関して勉強しろということです。そういう時代です。この場合は単に不登校の子どもに対する対応だけではなく、それが先生ご自身の職能開発にどう影響を与えたか、ここまで踏み込んで記されている点、これは最後に異議なく最優秀賞に選ばれました。

優秀賞の一つは熊本大学教育学部附属小学校、井上裕一先生の「地域の特色に対する見方や考え方を高める社会科学習の工夫」が選ばれました。この論文は人吉盆地の平坦地と山間地のお茶の生産の違いに着目して展開されております。子どもたちは非常に魅力的なテーマに導かれ、資料や学習活動の準備も念入りになされて

おりまして、筆者の指導力をうかがうことができます。

とくに最後は、お茶のラベルを作るという動機づけが記されておりますが、それは生産者のお立場から、あるいは熊本県人としてのお立場から、もっと子どもの意欲を高める必要があったように思われますが、総じて二つのお茶作りを比較しながら、既知の地形を具体的にとらえさせる、同時に人々は盆地特有の気象条件を生かしたり、克服したりしているということを子どもに生き生きとつかませた優れた論文です。この論文は小学校中学年のところでとくに重視される、地域における生産と、その生産されたものの特質、それをまたさらに全国に発信する技能、この三つを育てていくという点では非常に優れたものだということです。

もう一つの優秀賞は岐阜県各務原市立蘇原第一小学校、中島英雄先生から寄せられたものです。題名は「『発達障害児教育を光に』誰もが心地よく共生する学校創り」です。非常に内容はデリケートな部分を含んでおります。印刷されるものをまた先生方、ご覧いただきたいと思いますが、特別支援教育はご承知のように全国で展開されています。国際的な教育制度の潮流は、実は全体としてはインクルーシブな方向へ流れております。また新しい学習指導要領では、個別の指導計画の作成が位置づけられております。

そういうことから、通常学級のなかで発達障害児の指導を通常学級担任が行うという時代が当たり前のことのようにやってくるでしょう。そういう変更を目前にして、この論文では、特別支援教育を必要とする子どもたちにさまざまな対応がなされて、きめ細かく実践的な内容が記されています。先生方が自分たちの学校でも取り組めるし、成果も出せるという点を多々含んでいるすばらしい論文でございます。

次に中学校のほうを申し上げます。中学校は80編の応募がございました。優秀賞1編、特別賞1編、奨励賞2編、計4編が選定されました。優秀賞には群馬県渋川市立古巻中学校の鈴木

幸枝先生の「思考力を伸ばす指導の工夫 概念地図と一枚ポートフォリオを導入して」が選ばれました。実は鈴木先生は昨年、最優秀賞をお受けになっておられます。これに続く第2回目の受賞です。この論文は物事に直面したときにじっくり考えて、勇気をもって解決に向かって取り組める先生を育成したいとお考えになった論文です。

生徒たちの変容が非常によくわかります。概念地図を作ったり、ポートフォリオを作成したりするときの生徒の活動は実に生き生きとしておりまして、意欲的なものに映ります。生徒の感想からも、5時間という時間のなかで十分に目標を達成したということが推測されるわけです。

読ませていただきますと、先生の教室が先生と生徒の信頼関係が生まれる場所であるということ、そしてそのなかに先生の指導力や熱意が生き生きと発揮されているということがよくわかります。そういうことを生き生きと想像することができるとい、私どものイマジネーションを大いにかき立てられる。これは、連続の受賞はどうだろうかという意見も実はございました。しかし多くの文芸賞等々でも連続受賞はよくあることのようにございます。私どもはこれを選外に落とすということはいたしませんでした。今回は優秀賞として表彰させていただくことになりました。

特別賞には広島県世羅町立世羅中学校、宮本直彦先生による「『ことばの教育』によって活用力を高める授業の創造」が選ばれました。この論文では検証をもとにして論理的に研究が進められております。達成目標をしっかりと定め、具体的な指導に向けての実践的な取り組みは大いに効果を上げております。いま求められている教育課題というのは的確にとらえられておりますので、新学習指導要領に対する位置づけもしっかりなされております。検証された結果によって、実は言語技術の習得そのものが20～30%ほど伸びているという点は研究の成果です。また思考力、表現力の向上もうかがえて、研究が地に足がついた確かなものであることがわかります。優れた論文であると考えました。とくに学校経営

という部分に、実は言葉の教育が並行されているという点が非常にユニークな点でございました。

さて、このようなかたちで今年も24回目の受賞式を迎えました。これからあとは委員長としての私個人の感想ですが、毎年非常にきめの細かい行き届いた論文を読ませてもらい、大いに勉強になっております。振り返ってみると、先生方がご自分の授業実践や生活指導の実践を文章にする、まさに文章にされて応募されているわけですが、先生方がそういう行動をなさったということは名誉のため、あるいは賞金めがけてということなのかということがあります。私はそうではないと思って、別の角度からこのことを考えています。

私の専門は日本近代教育史ですが、日本の歴史をながめてみますと、やはりものを書く、しかも自分が子どもたちに対して何をやったかを書き記すという流れは、実は日本の独特の貴重な遺産だと思っています。これが始まったのはいつくらいかをたどってみると、教育雑誌が山のように出始めたのが明治30年前後、20世紀に入ったころです。このころに実にたくさんの教育雑誌が生まれて、その教育雑誌のなかにだんだん授業記録というものが出てくるようになります。

やがて大正時代になりますと、今度は新教育が普及してきます。新教育が普及すると、子どもたちに新しい活動を行った記録がまた作られていきます。たとえば、すぐそこに飛鳥山という桜

の名所がございます。遠足で飛鳥山に子どもたちを連れていった、樋口勘次郎という人が書いた飛鳥山遠足の記録は、日本における子どもたちの指導記録のもっとも古典的なものです。歴史のうえではそこから大正の新教育が始まったといわれています。

昭和になりますと、戦時下にもやはり先生方の記録が出されました。平野婦美子さんという方の『女教師の記録』は当時の文部大臣奨励賞まで受けたユニークな記録です。戦後をご承知のように「山びこ学校」をはじめとしてたくさんの実践記録が生まれたわけです。そして60年代に入ったあたりから、次第にこの記録は薄れていったのですが、にもかかわらず先生方が子どもたちとのつながりを書くという動きはちゃんと残っていて、その一端がおそらく東書教育賞への応募になって残っています。

言葉を変えて言うと、先生方が教育実践を記録にして書くというのは一種の文化だと思います。日本独自の教員文化というものがあって、きわめて大事にしなくてはいけない文化だと思います。そのなかで記録を書く、自分自身のことを書く、書くことによって反省し、また子どもたちと、とくに自分自身の成長に資するということを先生方はなさってきました。そういうものの一端として東書教育賞があるということを、私どもはたいへんうれしく、かつ誇りに思っております。おめでとうございました。

第24回「東書教育賞」の審査を終えて



B部門審査委員長

坂元昂先生

受賞者の皆さん、おめでとうございます。B部門はA部門の基準に加えてICT活用となっておりますので、ICT、メディア、インターネットなどを有効に活用してくださったという観点からの審査をさせていただきました。その結果、最優秀賞に、今日おみえでいらっしゃいますが、日野市の教育委員会のICT活用教育推進室長、五十嵐俊子先生がずば抜けた評価で最優秀賞。私どもB部門では優秀賞はございませんでした。その点は残念でした。

五十嵐先生の論文が選ばれたことの背景ですが、先ほど社長さん、それぞれからお話しただいたなかにも含まれておりますが、恒例になりましたので、世界の情勢を踏まえて説明せよということです。少しお耳を汚させていただきたいと思います。

こここのところ数年、私は海外の初等中等学校を一生懸命見て回っております。アメリカ、イギリスという先進国だけではなく、シンガポール、韓国、台湾といったようなアジアの先進国、ベトナム、バーレーン、この間はカンボジアに行っていました。1年前がチリ、インド、ケニアとか、いろいろなところの学校を見てまいりまして、だいたいITをどういうふうに使っているかというところの学校ですが、感じましたのは、先進国、途上国にかかわらず、すべての国がきちとした国策をもっています。日本にもあります。カンボジアですら、「すら」というのは失礼ですが、

ICTの普及促進の5カ年マスタープランを立てています。カンボジアの状況はたいへん悲惨ですが、その国ですら国策としてがんばっています。

ただ全部見まして、いろいろな先進国、途上国があるのですが、その上のほうの先進国の試みは比較的共通しています。若干、層の厚さや活用のレベルに違いはありますけれども、上のほうのほんの上澄みはほとんどの国も変わらないというくらいになっております。たとえば、この間見てきたこれはイギリスの例ですが、だいたい英米では電子黒板をよく使っております。たとえば先生が電子黒板で絵の点描をずっと説明します。先生はマネのモデルみたいなもので説明するのですが、子どもたちは自分の好きな絵を描くとか、小学校の2年生だとテニスをやっているところをビデオカメラで撮りまして、あとで分析して、時差再生をして、どこをどう直すかとか、いろいろ日本でもやっているような扱い方が世界的になされております。シンガポール、韓国でも同じようにやっています。教科のコンテンツも使うというようなことをやっています。ベトナムでは目の不自由なお子さんが点字でコンピュータ作曲をするというようなことも拝見して、ベトナムではこんなことをやっているのかと感激したことがあります。

だいたい電子黒板があって、教室の中に五つくらいの島をつくって、一つの島に5～6人の子どもがいて、だいたい30人以下の構成で、大人が1人か2人、これはボランティアだとかいろいろ

な人がついてサポートするというのがごくごく普通の状況です。日本では残念ながらあまりないのですが、ITだとか学習の指導の専門家がコーディネーターとかリーダーみたいなかたちで公費で配置されたり、あるいは公費で雇ったりできるというようなことになっていて、先生方がたいへん助かっているということです。

非常に進んでいる韓国ですが、こちらはデジタルテキストブックというプログラムが、新しく去年始まりました。日本でも教科書があるし、東京書籍でもちゃんとデジタルの教材みたいなものを用意しているわけです。「デジタルテキストブック……、いろいろなテキストを電子化するのかな」と思って見に行ったら全然違っていて、名前が悪かったのです。学習指導、学習管理、教務、校務、人事、そういうものをトータルな教育システムとしてやるのだと20校つくりまして、それでどんどんやっている。これが未来の学校教育のあり方かなというような気がしました。そういうような状況で進んでいます。

もう一つ言いたいのは、ベトナムに行ったときに、台湾がベトナムの学校に2200台のパソコンを寄付するというので、文科省にちょうど立ち会わされまして、その贈呈式を見ました。文科省の局長さんがちゃんと受け取ったり、もらう学校の校長さんがざっと並んで、それぞれ協定書を台の上で結んだりというすごい儀式がありました。

カンボジアにマレーシアがコンピュータを寄付する。韓国が寄付する。マレーシアはカンボジアのトップクラスの4位くらいのいい高校にコンピュータを寄付して、その運用費も寄付するわけです。ただし、政府からは一銭もお金が出ていないという状況です。800人くらいの小学校の先生の人件費を除く、すべての教材からメンテまでを含めた年間費用が1000ドル。これで一生懸命教育、学習をやっているという世界の状況です。

日本はどうか。日本もがんばっております。先ほど社長さんからお話があったように、IT改革戦略というものがあって、そのあと教育基本法、学校教育法、学習指導要領ときて、その学習指

導要領の総則でITを使うということがずいぶん重要視されましたし、各教科でも特別メンションされているのがあるわけです。そしてICTを使うということに向いてきたのです。

そのあとにできた教育振興基本法のなかに、いまのICTへの基本政策が出ています。ご存じだと思いますが、ICTの環境を整備する、教員のICT指導力向上を支援する、教材コンテンツの利用等の支援をする、有害情報への対策を講じる、情報活用能力を育成する、これを今回受賞された五十嵐先生のところでは、もうすでにやっておられる。日本のこれから進むべき道のモデルがここにあったということで、したりと我々は思ったわけです。

いま日本が直面している課題、我々は日本教育工学振興会、東京書籍にもずいぶんお世話になっている団体です。そこがいまの教育の問題点、とくにICT関係の問題点を調べました。そうすると、校務、情報システム、学校経営、システムを導入するという点です。IT環境、ネットワークとコンピュータ、デジタル装置、コンテンツの整備が足りない。教員のICT活用指導力が不足している。ICT活用の重要性の認識がなされていない。ICT活用のサポート体制の整備が遅れている。ICT活用をする環境整備の予算の確保がなかなか難しい。こういう問題点がありました。

そこで、議員さんたちに対して陳情活動をするということでもまとめたのが5項目あります。「ICT環境を整備する。校務の情報化をしっかりと。普通教室でのICT活用を推進してください」。これが一つ。二つ目は「ICT活用指導力向上の研修をしっかりとやってください」。そのための予算をつける。サポート体制の整備をする。海外のように専門家をつける。定数がどんどん減らされたり、せっかく外の定員がつくかと喜んだら、減らされたりというような状況があります。それではいけません。予算配分をなんとか交付税でほかのほうにいつてしまわないで、教育のためにちゃんと使ってほしいというようなこと。最近では教育CIOとか補佐と言っています。これは日野市のほ

うではちゃんとその実質的なことをやられています。こういうような状況がいまの日本です。

これにぴったり応えたモデルになるのが、今回の五十嵐先生の受賞のお仕事です。まずいろいろな手立てを講じていらっしゃる。いろいろな点で感心、感服しています。まずICT環境の整備については、先生一人にパソコン1台を持たせてしまう。校務支援システムというものを全校に導入する。全部の小中学校を校内LANで結ぶ。校内LANを設置して、だれでもが使えるようにする。とくにメディアコーディネーターという人を4人置かれて、学校を1週間回る。ただ単に回るだけではなくて、いろいろな要望項目等がリストになっているなかから、こういう中身の仕事をこういうふうに指導してくださいというような要望が出て、それに従って行く。ただ来てくれと、行くのではないのです。そういうようなことで、メディアコーディネーターというものがつくられている。

ICTの活用教育のできない先生をゼロにする。これは大成功で100%、みんな使えるようになっていらっしゃる。メディアコーディネーターが個別指導に行ったりして、先生を手当てされている。お役所というのはだいたいばらばらでしょう。こっちにもIT関係、こっちにもIT関係、それをICT関連の各委員会で連携をとったり、校務情報化を推進したり、モデル校を支援したりする。これもおもしろいのですが、Webによって見える学校、Webで学校がいまどういうふうに動いているかというのを地域に公開して、見せる。そうするとご父兄はたいへん安心されるわけです。紙ベースで配るというのはありますけれども、Webで見れば、すぐたちどころに学校で何があったかというのわかります。学校が見えるのです。

そのための戦略がまた素晴らしいです。3年間、3段階に分かれて、いちばん最初は校長さんを重点に、その次に先生を重点に、それから子どもを重点にというふうにして、校長さんから始めたというのが素晴らしい。だいたい研修は先生たちがやってITが使えるようになって帰りま

すけれども、校長さんの理解がなければ全然効果を発しません。ですから、校長さんから研修された。しかも校務支援システムという校長さんに直接かかわるものとか、見える学校にするというようなことの研修をされました。

メディアコーディネーターは、1週間学校に行っているいろいろご指導なさる。これは1年目で、2年目の先生は先生の指導力、18項目があります。それを支援する。全部の先生、100%が指導できるようになっております。このコーディネーターの支援をいただく内容がおもしろいのです。授業展開案の指導を支援してもらう。授業中の指導を支援してもらう。これが、展開案が36%、それから授業中の指導支援が26%。6割以上がITをどう使うか、ここをどう直すかなどそんなことではなく、ITを使った授業をどう設定したらいいか、どう効果的に使ったらいいかということところへの支援を現場が求めている。それに対して応えている。これがすばらしい。

そして、次の年に子どもの学力の向上。子どもがITを使ってやる。こういうところの推進室といいますか、その役割は専門家同士、地域の専門家や企業と連携をとるとか、校長、教務主任等を学校のCIOみたいに仕立て上げる。現場の先生の指導をするとか、見える学校で、広報を手伝う。そういう機能を果たされます。

ここの地域の特色として、地域との連携、サポート体制をICT教育推進室が中心となってつくる。校長から研修を始めて、先生、子どもという順番です。ここがすばらしい。現実的だと思います。校務の支援システムをして、先生方がより子どもたちに接触できるような時間を確保する。メディアコーディネーターがそれをサポートする。その結果、小中全校の全員がパソコンを活用して指導できるようになられているし、見える学校で、Webの更新率が日本で2位くらいというようなことになります。

まさに教育振興基本計画で強調されていることを先行的に実施なさっている。これは、これから日本のいろいろな教育委員会にぜひ広げて

いっていただきたいし、文科省あたりでも文言としては強調していらっしゃるのですが、具体的な手立てとして、モデルを示すとか、ご指導なさっているようにはあまり見えない。日野市のICT教育推進室のモデルは日本のモデルになるのではないか。一般化にもなるだろう。

A部門でも学校経営が増えてきたというお話です。そういうことはITを抜きにしては学校経営の改善は考えられないし、もう当たり前のことです。普通の指導で黒板を使うのが当たり前と同じように、もう電子黒板を使うのも当たり前、電子教材を使うのも当たり前。とくにチョークの使い方、スライドの使い方、一時そういうことばかり一生懸命やった時期がありますが、もうその時期は過ぎてきてしまって、ITを使うのはもう当たり前だという時代になってきました。

私どもはA部門、B部門と分かれて審査させていただきましたが、もう我々から見ると、A部門での立派な先生が上手にITを使っているということこそが一般化と言いますか、教育の改革、授業の改革につながるだろう、教育経営、学校経営の改革につながるだろうという思いをもっているわけです。五十嵐先生のような実践が全国に広がることを願っておりますし、そういうことのきっかけにこの賞がなれば、ますますうれしいことと存じております。どうも失礼申し上げました。

審査委員の 講評・所感

小野具彦先生



受賞された先生方、おめでとうございます。つい先日、ある多摩地区の中学校の研究発表会に参加させてもらいました。研究の主題は「学習習慣と学習意欲を育てる学力向上への取り組み」でした。そして副題は「続ける、伝える、活用する」でした。「続ける」に当たるものは繰り返し学習を徹底することにより、学習習慣と基礎的、基本的な学習内容を定着させる。さらに「伝える」では学習活動を意識した授業改善を進める。「活用する」では、学習活動を意識した授業改善を図る。こういう内容の実践でした。

そのなかで特筆すべきと私が思った一つは、生活のリズムをつくり学習習慣を育成することを狙いとした一人一人の生活表の徹底がありました。私もかつて学級担任のときに子どもたちに作らせたこともありました。その当時は、多くの学校で夏休みには子どもたちにそうした生活表の作成を指導していたように思います。これは学級担任の負担がきわめて大きいので、そこまでやらなくてはならないのかなとも思われますが、この学校では見事に中学校1年生で、1時間ないし2時間の家庭学習の習慣化ができた生徒を増やしていました。

一方、ある区立中学校の報告によりますと、授業改善を進めることはもちろんですが、放課後の学習教室、さらに土曜講習、夏休み中には補修、さらに勉強合宿まで行って、朝8時半から夜の10時まで学習をさせたという報告がありま

した。

この1週間、学力をどうとらえるのか、知識のみ増やす学習でいいのだろうか、学力は知識プラスアルファがつくるのではないか、そしてそのアルファなるものを大事にしたいと考えた1週間でした。この1週間、そういったことを考えて過ごしました。

さて、A部門、中学校で「思考力を伸ばす指導の工夫」を寄せられた群馬の鈴木幸枝先生は、昨年に続き優秀賞の受賞です。しっかりした指導計画に基づき、生徒たちが問題解決学習の過程を通して科学の方法と、その視点を身につけています。論理的な思考を着実に伸ばしている実践だと思います。

広島宮本直彦先生の「『ことばの教育』によって活用力を高める授業の創造」は特別賞を受賞されました。言語技術をしっかりと身につけさせるということは、確実に思考力を高める表現力とつながることだと思います。生徒の実態を踏まえて、全校的な取り組みとして「ことばの教育」による授業改善を実践しています。生徒を着実に伸ばしていることはすばらしいことだと思います。宮本先生の学校経営への意欲的な取り組みに、さらなる充実と発展を期待しております。よろしくお願いいたします。



受賞者の皆様、おめでとうございます。教

育賞の役割は言うまでもないことですが、いい論文をほめてあげるという役割も一つあるし、それからみんなに競っていい論文を書いてもらおうという気持ちもあるし、あるいはこれがいい論文ですよというお手本を示すという意味もあると思いますが、私はそれよりもこういう教育がいい教育ですよということを皆さんに知らせる、そして日本の教育がよくなることに貢献することが大きな役割だと思います。

そういうことを考えたときに、論文を見せていただいたときに、抽象的な言葉で書かれているものがあります。なぜそれを言うかという、皆さんにこのいい教育をしてもらおうということを考えたなら、抽象的な言葉で言っていたのでは、それが伝えられない。もっと具体的に何をしたかということがよくわかるように具体を通してやらなくてはいけない。先ほど寺崎さんが一般性ということをおっしゃいましたが、私はもっと言うと再現性というか、この人の実践をまねしてみたいと思ったときに、まねすることができるものになっているかどうかということを、今回いざばん大事に思いました。

そういうことから言いますと、最優秀賞を受賞された福本先生のは特殊と言えは特殊だけれども、とても具体的に書かれています。同時にこの先生をまねしてみたい、まねすることができるなという中身でもあったと思います。そういう論文を私はいい論文だなと思います。だから感動を与えたい論文というだけではなくて、まねすることができるものを、そして教育の実践のお手本になるような論文を私は求めたいと思います。

そういう意味で言うと、いま教育界は若返っています。団塊の世代の先生方がいなくなって、若い先生が多くなってきました。私は数学教育を専門にしていますが、数学の授業のいい授業というのが一般にどう考えられているかということですが、一般には丁寧なわかりやすい解説をして、楽しく練習をして応用できるような授業がいい授業だと思われていると思います。私はだいぶ前か

ら言っているのですが、それが本当にいい授業かなと。

ということかと言うと、丁寧な解説をして、それからあとに应用するのだけれども、その丁寧に解説しているときに、子どもはいま解説している数学は何の役に立つのか、どういう意味で学習しているのかということがわかってやっているのだろうか。ひどいときには、これは学習指導要領で決まっているのだから、教科書に書いてあるのだから、勉強しなくてはいけないことだからやろう。それをわかりやすくやっている。そういうことでいいのだろうか。練習しているときも何の役に立つのかかわからないけれども、勉強することになっているから練習しようというのでいいのだろうか。そうではない教育をしてほしい。要するに勉強しているときに、これは大切なことだから、役に立つことだから、意味のあることだから勉強している、練習しているのだということがわかるようなものになってほしいと考えます。

そういう目で見てみたときに、教科書に沿って丁寧にやればいいのかと言うと、そういうわけにはいかないと思っています。教科書も解説して、練習して、応用ということになっています。最初は解説、練習、終わりのほうに応用、一次方程式の応用などが出てくる。そうではなくて、もっとはじめてから応用をやろうという提案をしているのですが、そういう授業をやってくれるかどうか、教科書ではそういうことはすぐはできないのですが。

極端に言うと、私は逆転しようと言っているのですが、まず使う場面、こんなことを解決したい、この解決をするのにいままでの数学も使えるのだけれど、工夫してこういう数学を使うともっと簡単に解けるよというような展開で、応用がまずあって、工夫があって、最初に物事があり、名前をいちばん最後に学ぶというような教育をやってほしいと思っています。そういう教育ができてほしい。そのためには若い人に期待するよりも、ベテランの先生、年を取った先生にそういう教科

書に沿った授業ではなくて、そういうものをお手本、実践事例として出していただく。各学校で教育研究授業をやることも大事だけれど、この教育賞を通してそういう教育が広まればいいなと思っています。

これは数学だけのこともかもしれませんが、ほかの教育の場でも、学習しているときに自分にとって意味があるものとして学習できるような教育ができるようになってほしい。そういう実践を見せてほしいと思っています。

受賞者の方々、そういう意味でいい論文を書いていただいております。ありがとうございました。おめでとうございます。

審査委員の講評・所感

多湖 輝先生



皆さん、おめでとうございます。とにかく受賞された方の論文を読ませていただいて、こういういい先生がたくさんいらっしゃるのに、どうしても子どもができあがってくるのかなと、率直なそういう感想です。私も千葉大の附属小学校の校長を5年ほど経験させていただきました。とにかく時代は変わりました。もうめっちゃめっちゃ変わって、我々ではとてもついていけない。しかし、皆さんの論文を拝見していると、あまり変わってもいないのかなという印象をもったり、私は最近のオバマ氏の演説を聞いて、さすがだなと思ったりしました。あれだけの大演説をできる我が国の総理は最近いなくなってしまって、未

曾有の講演と言っていていいでしょうね。ああいうのを踏襲していただきたいですね。日本の政治が低迷しているのはまことに残念であります。

そういうことで学力というのはいったい何なのか、よくわかりませんが、私は今週末からまた東南アジアを少し旅してくる予定ですが、めちゃめちゃ勉強しています。韓国は昔からめちゃめちゃでしたが、中国人とこの間、話してありましたら、進学校の一流の、とくに北京の有名な学校なのだろうと思いますが、朝の7時半から夜の9時半まで、土曜なしです。毎日徹底的に勉強して、彼らが目指しているものは何かといったら、ハーバード、MIT、スタンフォード大学で、しゃかりきに勉強しているという話を聞きました。一般の公立校でもけっこう、8時から6時くらいまで小中学校でもそのくらいやるのが常識で、日本の教育を見ていると、ちょっとかたまりののではないかという感じをもっているようであります。

インドがとくにIT関連のすごい業績を上げている。これはもう皆さんご承知のとおりですが、最近、私が非常に憤慨しているのは超一流といわれたトヨタ、ソニーが軒並みにばらばら派遣社員を切っている。こういうようなことがなぜ起こってきたのか。こういうことも考えなければいけないし、私はいま本当の意味で日本人が志や人間力など、そういうものをもうちょっとどこかの過程できちんと鍛えていく場面がないと、完全にアジアの盟主にはとてもなれないという、そんな危機感をもっております。

この間、伊藤忠の丹羽さんの話を聞いておまして、ああ、そうかと思ったのですが、我々から言わせると、これからは理系だと思います。理系の高度な知識、技術をもった人を日本では養成していかなければいけない。ソニーの創業者の井深さんは、私は個人的に昵懇だったのですが、あの方が戦後の日本を見て、これからはとにかく理系の人間をつくっていかなければだめだと言われたその言葉を思い出します。ソニーは理科教育振興財団というのをつくって、理科教育を盛んにするためのさまざまな手立てを打ってきて、

私もそのときの運動、あるいは論文の審査などに関係していました。

そのころ家電のメーカーさんの研究所に行ってみますと、家電というから、電気工学か何かを勉強した人がいるかと思うと、まず一人もいません。ほとんど光の研究が中心でありまして、私は、高等学校は理系だったのですが、電子だとか原子だとか分子だとか漠然としているようなことを若い人たちが堂々と我々に説明してくれるのに本当にびっくりしました。あなた、これは大学で習ったのかと言ったら、「いや、大学では習いませんでした。この研究所に来てから初めていろいろなことを勉強しました」と言われて本当にびっくりしました。

日本の若手の人たちはすごいエネルギーと知力、学力をもっているのだと思います。ただ、世界を見る目をあまりもっていないという気がして仕方がないです。携帯電話でも、とにかく凝り性ですからどんどんバージョンアップして、そしてもういまやパソコンと同じ機能をもつ。今度はデザインを凝って、美しくて軽くてどうのこうのと言って、そして高額な商品をつくって、売れるかという売れないのです。中国のあの大きなマーケットから完全に撤退でしょう。

つまり日本という国がまだそこそこのマーケットとして成り立つから、あまり世界を見なくても危機感をもっていないわけですが、この間の伊藤忠の丹羽さんの話を聞いて、そのとおりだと思ったのは、もうこれから外がだめならば内需を一生懸命やらなければいけない。その内需と言うときに日本の国内を考えてはいけません。東南アジアに目を転じて、いまどんどん経済的なレベルが上がってまいりまして、人間が生活している、人口が増えている、そういうところでは必ず大きな経済チャンス、ビジネスチャンスがある。ものを買いたがります。だって隣の人が持っていて、私がない。あれ欲しいな。爆発的なそういう都市が東南アジアにもどんどんできてきている。ただ、彼らはまだお金をもっていませんから、そういう大きなマーケットを狙って、日本の

技術屋がそこに飛び込んでいって、彼らが求めるものをつくったら、絶対に世界に引けを取らない立派なものができると思います。

日本人は自動車を一生懸命やった。自動車というのは3万くらいの部品でできるといわれています。ところがジェット機を1機つくると、30万の部品がいる。それだけ大きな産業になるのです。ジェット機をつくるくらいの技術なんて日本はもうむろんもっているわけです。この間、私は大阪の中小零細といわれているような人たちが7～8年かかってロケットを打ち上げたのを見て、本当にうれしくなりました。ああいう技術をもった人たちがたくさん日本にいるはずですが、どうも世界のマーケットの流れを見ていない。だから本当に売れる商品を見つけられない。

青年が、若者が、本当に目を輝かせて、あの企業に入りたい、そういう大きな新しいジャンルをつくっていく人材が、いまの学校教育、大学までずっとやってきて、はたしてできるのか。テレビの情報ですと、東大に中小零細の企業の人たちを導き入れて、そこに小さな工場をつくり、そして大学が関係して新しい技術の芽を育てるといような試みが行われているようですが、早稲田大学も非常に熱心に理工系の中小零細と組んだ仕事をどんどん進めておられる。そういうふうにしてこれから人間教育、そして世界が見られる、世界をどういうふうに見て、どういうふうに日本の国を構築していくのか、その眼力をもてるような人材を先生方にぜひつくっていただきたい。それが私の心からの願いであります。

もう私は24年ずっとこの審査に携わってまいりました。もう1年生きていたら25年まで四半世紀やらせていただいて引退するのが格好いいかなという気がしなくもないのですが、なにぶんにも後期高齢者どころか、いまや末期高齢者であります。下手をすると終末高齢者と呼ばれる域に入っております。なんとなく元氣ぶってやっておりますが、とにかく世界に目を開く、そういう大きな人材をぜひ先生方、心がけてつくっていただきたい。お願いしまして、今日は本当におめでとう

ございました。



受賞なさった先生方、本当におめでとうございます。審査に携わらせていただきまして、私の専門の立場から申し上げますと、ことにうれしかったのは、言葉の教育、それから言語カリキュラム、言葉の教育のほうは特別賞、宮本先生、言語カリキュラムのほうは奨励賞、矢原先生ですが、こういう研究が出てきたんだということで、たいへん感銘を受けました。それと同時にこれはここにいらっしゃる方に申し上げても仕方のないことで、いらっしゃらない方に向けてのメッセージとなるかもしれませんが、実は私の専門の英語教育からいいますと、英語がまったくここに入っていないのはたいへん残念に思いました。応募がなかったわけではないのですが、数が非常に少なかった。きわめて少ないうえに、内容も創意工夫という点では残念ながら他教科にかなわなかった。それから一般性という意味でも、これを日本全国に広げていったら、非常に英語教育は改善するだろうというようなスケールのものがなかった。それは、私はきわめて残念に思っております。

これはただ単に私の専門がたまたま英語というだけではなくて、ご承知のように、いま英語教育は非常に大きな分岐点に立っております。小学校5年生、6年生で、英語教育ではないのです

が、英語活動が必修科ということになっていました、実はもう現実的には90%以上の公立小学校でなんらかのかたちで英語教育が始まっています。それから学習指導要領が始まる前にも可及的速やかに前倒ししてやっていくということで、現場は走り出しています。にもかかわらず、小学校からもまったく提案が出なかった。そしてそれを受けるいちばん大事な中学校からも、実はこういうことを試している、これはどうでしょうかというような提案がなかったというのが、私にはある意味で意外であり、残念でした。

とはいえ、学習指導要領は正式にはまだ始まっていないわけで、これからということですので、今後に期待したいと思っています。小学校においては、いまは現場が混乱しているからやむを得ないということもあるのですが、小学校の英語活動だけをどうしようかと見るのではなく、幸いと言いますか、これはまだ教科になっておりませんで、英語活動という必修のなかで工夫してやってみてくださいということで、表向きは英語ノートも義務化はされていません。使ってもいいし、使わなくてもいいということに一応は表向きはなっておりますので、私は小学校教育をトータルにもっと総合で全体を見て、小学校の6年間の教育のなかの最後の仕上げの5年生、6年生で英語活動の時間のなかでいったい何をするのか、それを中学校にどうつなげていくのかという視点からぜひ研究していただきたい。

そして、中学校英語教育は今年週1時間増えるということもありますし、それだけ余裕ができてきたわけですが、今度はさまざまなかたちでの英語らしきものをやってきたかもしれない多様なバックグラウンドをもった子どもたちが、真っ白ではなく入ってくる。その子どもたちを受け止めて、どうやっていちばん大事な英語の基礎をつくって高校に送り出していくのか。このつなぎの意味での一貫性の要としての中学をどのようにしていくのかということについて、私は創意工夫に満ちた、そしてこれを日本全国に広げていけるといような優れた論文が出ることを、来年度、25

周年ですので、ぜひ期待したいと思っております。

フィンランドは教育の質が高いということで、いま話題になっておりますけれども、フィンランド大使館の方に伺いましたら、とにかくフィンランドでは国の最重要なものが教育であると考えている。そして教育のなかで第1に大事なのが教員、第2に大事なのが教員、3、4がなくて、5、6は教員であると。つまり、教育を担う教員がいかに大事かということを力説していらっしゃいましたけれども、私もまったく同感です。先生方、これからはますますこれまで積み重ねてこられた実践研究を発展なさり、そしてお帰りにになりましたら、私のメッセージをご自分の学校の英語関係者にぜひお伝えいただきたいと思います。本日は、まことにおめでとうございました。

審査委員の講評・所感

三上裕三先生



東書教育賞を受賞されました先生方に心よりお祝い申し上げます。私は、小学校A部門を中心に感想を述べさせていただきます。

第24回を迎えた今年度の応募総数については先ほどご報告がありましたが、小学校のA部門は、昨年度に比べて僅かですが、減っております。論文を教科等の内容別に見ますと、国語、社会、算数は昨年度とほとんど変わりませんが、理科が半減したのが気にかかるところです。一方、大幅に増えたのが経営部門です。全体の中でもっとも応募数が多かったのが経営部門です。これ

は、学校経営の立場から直面する教育課程改善のために全校で取り組まれた教育実践が多かったことを意味しています。管理職である校長、副校長をはじめ学校の中核となる先生方が教職員をリードしながら研究が着実に進められているものと思われます。

さて、最優秀賞を受賞されました御所市立葛小学校福本義久先生、受賞まことにありがとうございます。先生は、現在奈良教育大学教職大学院で学びながら、「不登校事例における教員の職能成長」というテーマでまとめられました。先生が過去に体験された不登校児童に対する指導・対応について大学院で学んだ理論的な枠組みの中で見直すことによって、自分自身の職能的成長を図ろうとされたものです。先生は、「理論と実践の往還」という表現を使われていますが、不登校の児童を目の前にして日々その対応に追われた当時を振り返りながら、現在学問と研究に専念できる環境にあることを十分に生かして、理論と実践の一体化を図ることを目指しておられます。当時不登校だった児童が成長して10年前のことを振り返る回顧録を入れるという手法を用いながら、読み手を引きつける表現の仕方が工夫され、現在不登校をかかえて悩んでおられる全国の先生方に大きな示唆を与えるものと思います。

次に、優秀賞を受賞されましたお二人の先生、熊本大学教育学部附属小学校の井上裕一先生、各務原市立蘇原第一小学校の中島英雄先生、受賞おめでとうございます。

井上先生は、4年生の社会科の地域学習において子どもたちの必要感や切実感を高め課題を追究する学習を工夫するにはどうしたらよいか、そこで、人吉地区で生産されるお茶に着目し、子どもたちが課題意識をもって取り組む社会科学学習を実践されたものです。盆地の地理的条件を生かした生産方法に、絶えず「なぜだろう」と疑問をもたせながら、課題の追究に当たらせ、お茶の収穫高や品質の良し悪しが気候や地形、水、土などさまざまな地理的条件と関連があり、

それらが生産に生かされていることを多面的に気づかせたものです。本実践は、指導者の視点の当て方ひとつで身近な教材が開発できる優れた実践であると思います。

次に、中島先生は、通常学級に在籍する発達障害児に対する指導を学校全体で取り組んだ実践をまとめられたものです。発達障害児教育に関する研究を長年にわたって続けてこられ、専門的な研究理念のもとに発達障害児に対する指導・対応の仕方、学校・保護者・関係機関との連携のあり方等、実践的にまとめられたものです。現在どのクラスにも発達障害児がいるのが普通といわれる状況の中で、中島先生の論文は、多くの先生方に参考にしていただきたい内容であると思います。

奨励賞は、2点あります。盛岡市立仁王小学校の佐々木寿洋先生は、「算数的活動を生かした思考を深める算数学習」として、新学習指導要領でたいへん重視されている算数的活動の具体的な実践例をご紹介いただきました。今後さらに研究を深められることを期待しております。

もう1点は、西尾市立寺津小学校の高橋正治校長先生の「『食育科』の設定と展開」というテーマで、小中連携のもと「食育科」を新設し、9年間を通して食の指導を実践されたものです。子どもの食育と体力が大きな課題となっている現在、本実践は全国の学校に対して、食の指導のあり方を考えるうえで大いに参考になるものと考えます。

新年度から新学習指導要領の移行期間に入ります。教科・領域によっては即実施とされたものもあります。第25回を迎える来年度は、さらに多くの論文が寄せられることを期待しまして感想とさせていただきます。

審査委員の講評・所感

赤堀侃司先生



一言述べさせていただきたいと思います。私はB部門ですが、五十嵐先生、また上野先生、おめでとうございます。五十嵐先生と私は日本教育工学会でたしかお会いしているのだと思いますが、ポスターセッションというのがありまして、通常のオーラルの発表というより、ポスターを使って発表するというので、たしか私はいくつか質問をさせていただいた記憶がございます。

そのなかの一つで、坂元先生がおっしゃいましたが、学校が見えるようにしようというのは、たしか私の記憶に間違いがなければ、担任の先生がやがてプール指導が始まるので、そのプールを1週間か何週間前に一生懸命指導されている様子を、校長先生がデジタルカメラで撮ってWebにアップした。それで保護者の皆さんに、「なるほど、学校ってこういうふうに先生方が努力しているのか」ということが伝わったという話を五十嵐先生から直接聞いて、なるほどデジタルカメラはこんなふうに役立つのかということで、たいへん感銘を受けた覚えがあります。また校長先生が校内を回って、ちゃんとデジカメで学校の様子を保護者に伝えていくというかたちの支援をされていたということを、いま思い出しました。

私どものB部門というのはICT活用部門ですが、一般的にはそういう道具をどうやって教育に使うかという考え方であります。私は所沢に住んでいるので、所沢の中学校の評議員をやっています。学校公開がありまして、学校公開に行

きますと、すべての授業を公開します。そのときに特別支援の子どもたちがいて、自分たちでカレーライスをつくる。学校公開ですから、小学生も来るし、近所の人たちも来るし、PTAの人たちも来る。そのときに自分たちがつくったカレーを売るのですが、札を見たら280円なのです。なぜ280円なのか。300円とか200円とかにすればいいのにと思ったら、ちゃんと先生が説明するのです。「いや、280円だからいい。300円出すから20円おつりを出さなくてはいけない」。計算能力に役立つと同時に、電卓が置いてあります。なぜ電卓が置いてあるのかといったら、将来この子どもたちが大きくなったときに、電卓を使い、またコンピュータも使えるようにしないと生きていけないからだということを聞いて、なるほど、道具というのはそういうものだろうと思います。

やはり我々は生きていくうちに、どうしても使わなくてはいけない部分というのはあるわけで、それを学校教育のなかで使わせていこうと、いたるところで学校の先生方は非常にきめ細やかに考えられているということを私はいろいろなところで見聞きます。それだけではなくて、掛図などいろいろなところで、道具をうまく使っています。

ご存じのとおり、OECDがキー・コンピテンシーという、いま求められるもっとも必要な主要能力が何なのかというのを三つ挙げています。一つは道具の使い方だと。これだけ世の中にいろいろなテクノロジーが入ったときに、それを主体的にちゃんと使える能力を身につけておかないと具合が悪いのではないかとというのが1点あります。あとはチームワークの力だとか、主体的に行動できるだとかありますけれども、世の中がこれだけ複雑になったときに、ちゃんと道具を使える、先ほど特別支援の子どもたちが電卓を使う、校長先生がデジカメを使う、そういうことで伝えていくということが、学校教育に少しずつ入ってきたということを私は感じました。

五十嵐先生はそれをきめ細かく、また行政という立場できっちりされているということに、私

はたいへんうれしく思ったし、ぜひこれからも続けていただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。おめでとうございます。



受賞された先生方、おめでとうございます。私はB部門のICT活用のほうですが、来年で25周年というお話でしたので、手元にある論文集で第1回からの受賞者のお名前を見させていただきました。そうしますと、あの方もここに投稿されていたのだという発見が何人もありました。

そこで私が思いましたのは、東書教育賞というのは、いま目の前にいらっしゃる受賞者の先生方への賞ではあるけれども他の意義もあることに気づきました。私は教育工学という立場で仕事をしていますから、大学の中だけではだめなので、学校現場と一緒にやっていくわけですが、いろいろなところで一緒にやらせていただいているのですが、私はいま思い出して、ああ、あそこは苦労したとか、がんばったかと振り返ったとき思い浮かぶ先生方のお名前が受賞者のなかにいっぱい入っているのです。

驚きましたのは、第1回に長野県の宮沢先生という方が優秀賞を受賞されました。そのあとそれが発展していった、長野市では篠ノ井西中学校にコンピュータが最初に入ってモデル校になった。当時、CAIと呼ばれていたころの教材作成のもとになる、紙ベースのものを作られたので賞

を取られていた。

いまのICT部門が分離して独立したときの1回目は、沖縄県の安和先生が優秀賞です。この方ともずいぶんやりとりがございまして、筑波大学においでくださったり、信州大学においでくださったり、私は毎年沖縄に行っているのですが、ああ、あの先生も投稿されていたんだというような感じでございます。あとつくば市の毛利先生、吉田先生もそうです。

そうやって考えていきますと、自分が学校の先生方と一生懸命やった地域の方がちゃんと東書教育賞を取ってくださっているということです。言い方を換えると、いま大学の評価が行われていて、いろいろなところで大学は外部評価を受けるのですが、ある意味、今日ここでそういうような評価を受けていて、賞を取られた方とやったことはよかったけれども、賞を取られていない方と自分がしていた仕事はちょっとまだやり方がまずかったか、アイデアがまずかったかなと、そんなことも感じさせていただいたような、いままでとは違った視点の気持ちでいまここにおります。

最優秀賞の五十嵐先生がやってくださっているお仕事は、今後日本のいろいろな地域のモデルになるのではないかとという坂元先生のお話でした。私もそういう仕事を、先生方とこれからがんばってやっていきたいと思います。